

タイ研修レポート2019

1月14日(月)～18日(金)、本校の13名の2年生が、益田市グローバルリーダー養成事業の一環であるタイ研修へ参加しました。主な訪問先は、タマサート大学、Bodinnon高校、サイエンスパーク、また、益田に本社を構えるシマネ益田電子のタイ工場でした。多くの生徒にとって初海外だった今回の研修は、実り多い旅になりました。その一部をご紹介します。

シマネ益田電子 タイ支社



タマサート大学

サイエンスパーク



モンスター・ハブ



高校での授業体験



お昼休みのスポーツ



サイエンスパーク訪問（1日目）

バンコクに2002年に建設された、タイ初の科学技術研究開発振興区にあるサイエンスパークを訪問しました。研究者から、タイの太陽光発電技術や農業技術、バイオ技術などについてお話をうかがい、タイの社会問題に即した先端テクノロジー研究の現場を見学させていただきました。日本とは異なるタイの社会問題を解決するための先端技術を学び、太陽光発電を効率よく行うための撥水コーティング技術の名前が「ロータス（蓮の花）」だったり、研究所の至るところに国王や王妃の肖像画が飾ってあったりしたところに、タイの宗教性や王国としての文化を感じとっていました。また、研究者の話に対し英語で質問できたことは、高度な内容を英語で学ぶ貴重な機会となりました。サイエンスパークは大学や高校とも連携しており、生徒らはタイの高校生たちがラボでバイオ研究に励む姿から刺激を受けていました。

タマサート大学でのプレゼンテーション（2日目）

タイで二番目に評価の高いタマサート大学を訪問しました。ゼミの大学院生たちに対し、益高生理数科による「課題研究の発表」、翔陽生による「日本の農業についての発表」、そして混合チームによる「益田市についてのプレゼン」をそれぞれ行いました。

出発までに英語でのプレゼンと質疑応答を準備してきた生徒たちは、一生懸命プレゼンを行いました。が、日本では出ないような鋭い質問もあり、文化が異なる外国ではプレゼンの仕方や内容も変えなくてはいけないということを改めて学びました。

また、昼食時には大学生らと積極的に英語でコミュニケーションを取っていました。タマサート大学の院生の研究内容や、その研究に至った経緯を聞くことで、外国で勉強するというものがどういうもののかのイメージも湧いたようです。

スタートアップ企業「モンスターハブ」（2日目）

島根出身の方が起業したモンスターハブというコワーキングスペースを訪問。タイ支店長の辺田さんと、モンスターハブに事務所を構えているTalentExの越さんという方に話をしていただいた。外国で起業することの喜びと大変さ、タイのアジアでの立ち位置や経済状況、また、海外から見た日本社会の姿について生徒たちは話を聞きいていた。

特に、越さんの話は、自身の生い立ちから、東大からタイにきた経緯、現在行っている、外国人プログラマーを教育して日本の企業に就職させるというビジネスについての話で、多くの生徒が刺激を受け、プレゼンが終わった後には多くの質問が飛び交いました。自らの意思で外国に移り、一から仕事を作っている方を目にあたりにし、生徒たちは、外国で生きていくということ、そして、外国と日本が蜜につながっているという現実を肌で感じたようでした。

ボディノン高校との交流（3日目）

熱烈な歓迎を受け、全校を挙げての「歓迎の式」をしていただきました。午前中はバディとともに「英語」や「情報」の授業を一緒に受けたりと、昼休みに一緒に校庭で遊んだり、校内を案内してもらったりと、タイの学校生活を経験しました。その中で生徒たちは、日本とタイの高校との違う部分を発見し、日本を相対的に見る視点を得ると同時に、日本とタイの学校で同じ部分を見つけ、自分たちと同じような高校生が世界にもいることを感じました。受け身で授業を受けるのではなく、タイの生徒さんらとお互いに身振り手振りを交えながらコミュニケーションを取り、短い時間の中で関係を作っていくことは、英語の勉強だけでなく、関係構築の訓練としても、よい機会となりました。なにより、言葉の壁を超えて他人と仲良くなれたことは非常に楽しく、各自の将来に向けて頑張るモチベーションとなりました。